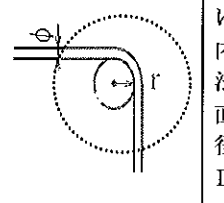
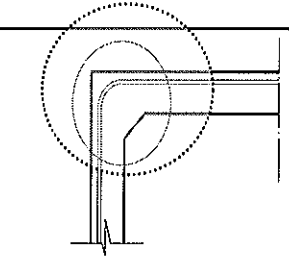
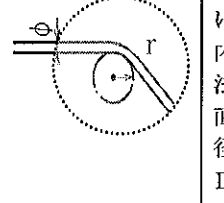
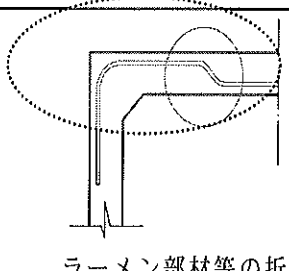
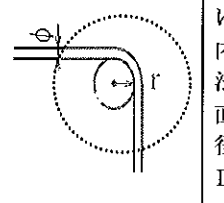
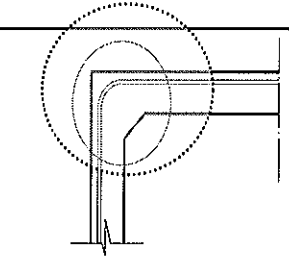
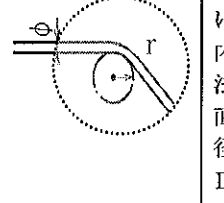
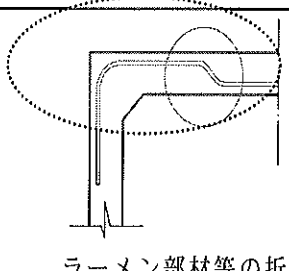
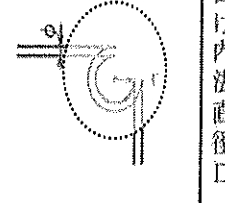
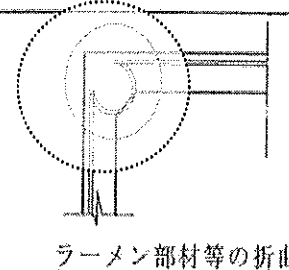
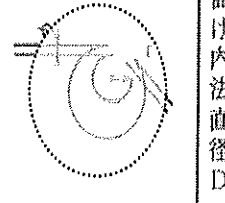
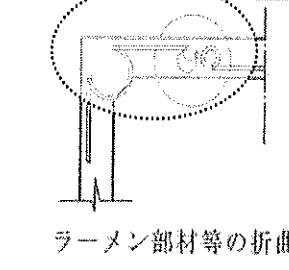
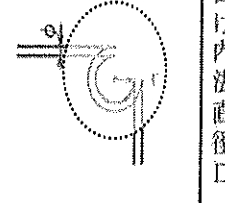
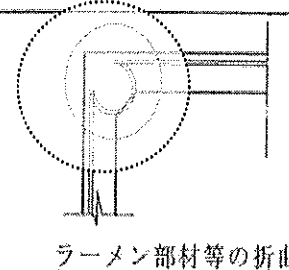
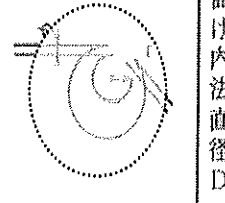
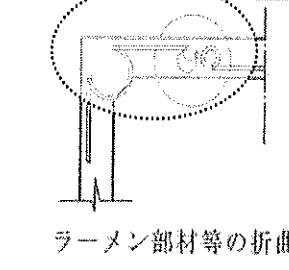
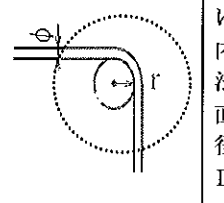
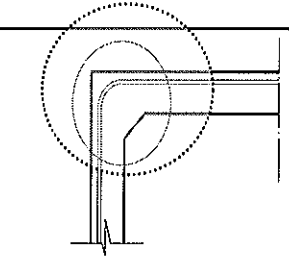
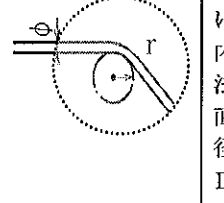
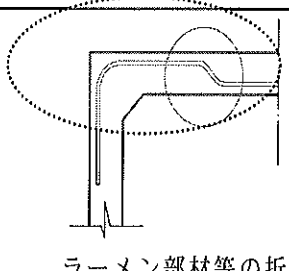
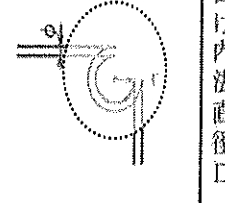
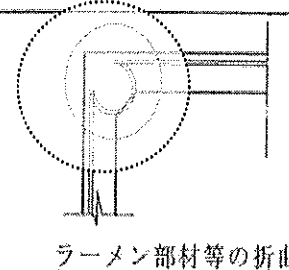
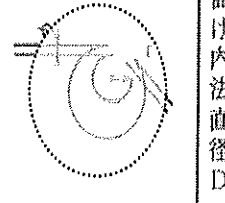
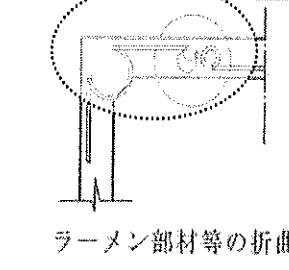
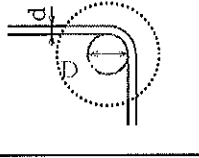
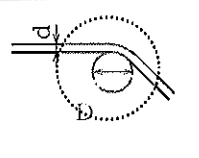
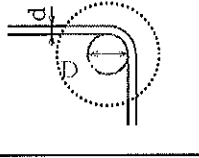
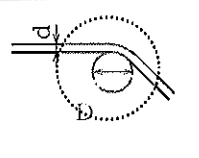
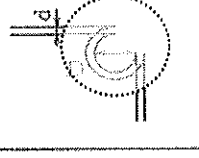
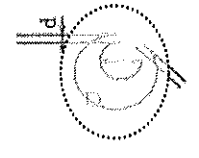
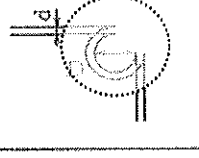
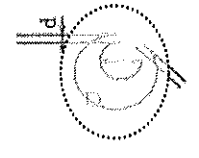
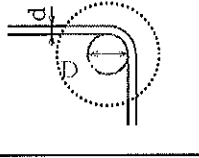
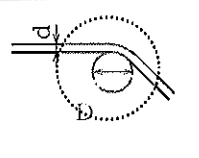
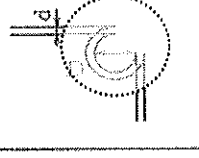
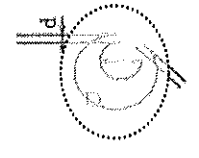


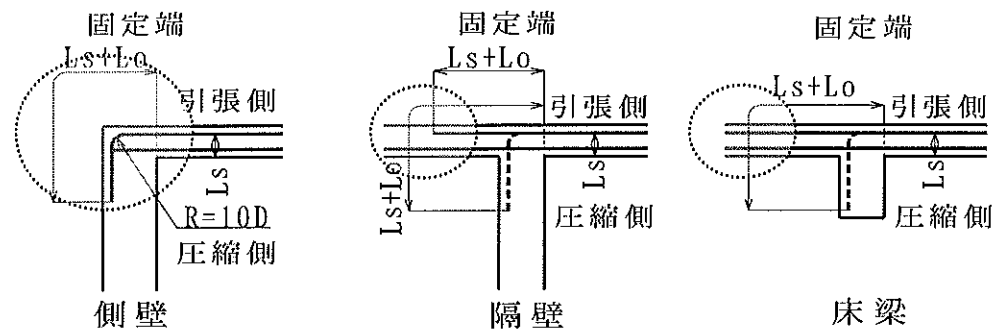
【農業集落排水施設（汚水処理施設） 土木構造配筋要領 正誤表】

ページ	正	誤																		
はじめに	平成 16 年 3 月	平成 16 年 4 月																		
5	<p>(2) 鉄筋の継手</p> <p>鉄筋の継手は重ね継手を用いるものとし、重ね継手が困難な場合はガス圧接継手とする。他に特殊な鉄筋継手（<u>建築基準法施行令第 73 条第 2 項</u>に適合するもの）もあるが、重ね継手とガス圧接継手を使用できない場合に採用するものとする。</p>	<p>(2) 鉄筋の継手</p> <p>鉄筋の継手は重ね継手を用いるものとし、重ね継手が困難な場合はガス圧接継手とする。他に特殊な鉄筋継手（<u>建築基準法施工令第 73 条第 5 項</u>に適合するもの）もあるが、重ね継手とガス圧接継手を使用できない場合に採用するものとする。</p>																		
7	<p>(2) 中間部の折り曲げは、表 3-2 による。</p>	<p>(2) 中間部の折り曲げは、表 3-2 による。</p>																		
	<p>表 3-2 鉄筋の中間部の折り曲げ寸法</p> <table border="1" data-bbox="341 1018 1389 1701"> <thead> <tr> <th data-bbox="341 1018 439 1144">折曲げ角度</th> <th data-bbox="439 1018 688 1144">折曲げ図</th> <th data-bbox="688 1018 1389 1144">使用箇所</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="341 1144 439 1417">その他鉄筋 90° 以下</td> <td data-bbox="439 1144 688 1417">  </td> <td data-bbox="688 1144 1389 1417">  <p>$r = 10\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="341 1417 439 1701"></td> <td data-bbox="439 1417 688 1701">  </td> <td data-bbox="688 1417 1389 1701">  <p>$r = 5\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p> </td> </tr> </tbody> </table>	折曲げ角度	折曲げ図	使用箇所	その他鉄筋 90° 以下		 <p>$r = 10\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p>			 <p>$r = 5\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p>	<p>表 3-2 鉄筋の中間部の折り曲げ寸法</p> <table border="1" data-bbox="1662 1050 2686 1701"> <thead> <tr> <th data-bbox="1662 1050 1760 1176">折曲げ角度</th> <th data-bbox="1760 1050 2009 1176">折曲げ図</th> <th data-bbox="2009 1050 2686 1176">使用箇所</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="1662 1176 1760 1438">その他鉄筋 90° 以下</td> <td data-bbox="1760 1176 2009 1438">  </td> <td data-bbox="2009 1176 2686 1438">  <p>$r = 10\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="1662 1438 1760 1701"></td> <td data-bbox="1760 1438 2009 1701">  </td> <td data-bbox="2009 1438 2686 1701">  <p>$r = 5\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p> </td> </tr> </tbody> </table>	折曲げ角度	折曲げ図	使用箇所	その他鉄筋 90° 以下		 <p>$r = 10\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p>			 <p>$r = 5\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p>
折曲げ角度	折曲げ図	使用箇所																		
その他鉄筋 90° 以下		 <p>$r = 10\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p>																		
		 <p>$r = 5\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p>																		
折曲げ角度	折曲げ図	使用箇所																		
その他鉄筋 90° 以下		 <p>$r = 10\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p>																		
		 <p>$r = 5\phi$ 以上</p> <p>ラーメン部材等の折曲げ部に用いる。</p>																		

ページ	正	誤																																								
8	<p>(2) 中間部の折曲げは、表 3-4 による</p> <p>表 3-4 鉄筋の中間部の折曲げ寸法</p> <table border="1" data-bbox="371 472 1418 949"> <thead> <tr> <th rowspan="2">折曲げ 角 度</th> <th rowspan="2">折 曲 げ 図</th> <th colspan="2">SD295A, SD295B, SD345 SDR295, SDR345</th> <th>SD390</th> <th rowspan="2">使 用 箇 所</th> </tr> <tr> <th>D 16以下</th> <th>D 19~D 38</th> <th>D 29~D 38</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">90° 以下</td> <td></td> <td>3 d 以上</td> <td>4 d 以上</td> <td>—</td> <td>あばら筋、帯筋、 スパイラル筋</td> </tr> <tr> <td></td> <td>4 d 以上</td> <td>6 d 以上</td> <td>8 d 以上</td> <td>その他部材鉄筋等</td> </tr> </tbody> </table>	折曲げ 角 度	折 曲 げ 図	SD295A, SD295B, SD345 SDR295, SDR345		SD390	使 用 箇 所	D 16以下	D 19~D 38	D 29~D 38	90° 以下		3 d 以上	4 d 以上	—	あばら筋、帯筋、 スパイラル筋		4 d 以上	6 d 以上	8 d 以上	その他部材鉄筋等	<p>(2) 中間部の折曲げは、表 3-4 による</p> <p>表 3-4 鉄筋の中間部の折曲げ寸法</p> <table border="1" data-bbox="1647 472 2730 934"> <thead> <tr> <th rowspan="2">折曲げ 角 度</th> <th rowspan="2">折 曲 げ 図</th> <th colspan="2">SD295A, SD295B, SD345 SDR295, SDR345</th> <th>SD390</th> <th rowspan="2">使 用 箇 所</th> </tr> <tr> <th>D 16以下</th> <th>D 19~D 38</th> <th>D 29~D 38</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">90° 以下</td> <td></td> <td>3 d 以上</td> <td>4 d 以上</td> <td>—</td> <td>あばら筋、帯筋、 スパイラル筋</td> </tr> <tr> <td></td> <td>4 d 以上</td> <td>6 d 以上</td> <td>8 d 以上</td> <td>その他部材鉄筋等</td> </tr> </tbody> </table>	折曲げ 角 度	折 曲 げ 図	SD295A, SD295B, SD345 SDR295, SDR345		SD390	使 用 箇 所	D 16以下	D 19~D 38	D 29~D 38	90° 以下		3 d 以上	4 d 以上	—	あばら筋、帯筋、 スパイラル筋		4 d 以上	6 d 以上	8 d 以上	その他部材鉄筋等
折曲げ 角 度	折 曲 げ 図			SD295A, SD295B, SD345 SDR295, SDR345		SD390		使 用 箇 所																																		
		D 16以下	D 19~D 38	D 29~D 38																																						
90° 以下		3 d 以上	4 d 以上	—	あばら筋、帯筋、 スパイラル筋																																					
		4 d 以上	6 d 以上	8 d 以上	その他部材鉄筋等																																					
折曲げ 角 度	折 曲 げ 図	SD295A, SD295B, SD345 SDR295, SDR345		SD390	使 用 箇 所																																					
		D 16以下	D 19~D 38	D 29~D 38																																						
90° 以下		3 d 以上	4 d 以上	—	あばら筋、帯筋、 スパイラル筋																																					
		4 d 以上	6 d 以上	8 d 以上	その他部材鉄筋等																																					
13	<p>(2) 梁及び柱</p> <p>鉄筋相互のあきは下記の<u>値の最大値以上</u>とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 骨材の最大寸法の 1.25 倍とする。 ② 最小 25mm とする。 ③ 隣り合う鉄筋の平均径の 1.5 倍 	<p>(2) 梁及び柱</p> <p>鉄筋相互のあきは下記を<u>最小値</u>とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 骨材の最大寸法の 1.25 倍とする。 ② 最小 25mm とする。 ③ 隣り合う鉄筋の平均径の 1.5 倍 																																								
14	<p>(2) 梁、柱の場合</p> <p>「鉄筋間隔」とは鉄筋の中心間隔、「鉄筋のあき」とは隣り合う鉄筋の表面間の最短距離をいう。</p> <p>鉄筋相互のあきは下記の<u>値の最大値以上</u>とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 骨材の最大寸法の 1.25 倍とする。 ② 最小 25mm とする。 ③ 隣り合う鉄筋の平均径の 1.5 倍 	<p>(2) 梁、柱の場合</p> <p>「鉄筋間隔」とは鉄筋の中心間隔、「鉄筋のあき」とは隣り合う鉄筋の表面間の最短距離をいう。</p> <p>鉄筋相互のあきは下記を<u>最小値</u>とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 骨材の最大寸法の 1.25 倍とする。 ② 最小 25mm とする。 ③ 隣り合う鉄筋の平均径の 1.5 倍 																																								

25

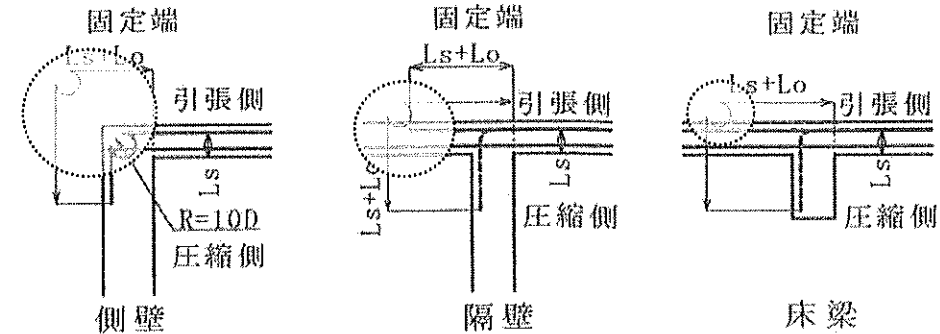
(3)床版配筋の標準的な定着方法は図8-1とする。定着する鉄筋は、原則的には定着部を引き通すが、引き通すことができない場合は定着部に、折り曲げる。



注1 図中のLsは部材の有効高、Loは定着長を示す。

図8-1 固定端における定着長

(3) 床版配筋の標準的な定着方法は図8-1とする。定着する鉄筋は、原則的には定着部を引き通すが、引き通すことができない場合は定着部に、折り曲げる。



注1 図中のLsは部材の有効高、Loは定着長を示す。

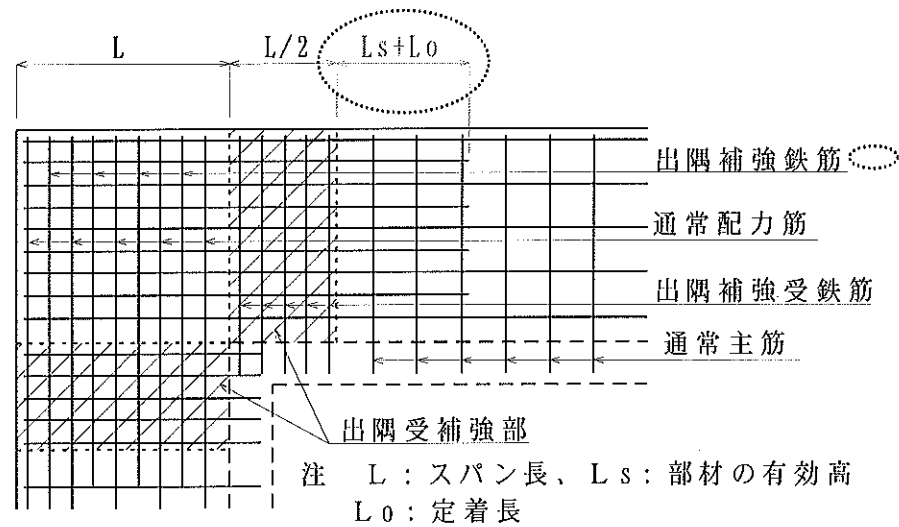
図8-1 固定端における定着長

26

8. 床版の配筋要領

4) 出隅部の補強

出隅部の補強は、出隅補強鉄筋と出隅補強受鉄筋とにより行う。標準的な出隅補強方法は図8-3に示す。



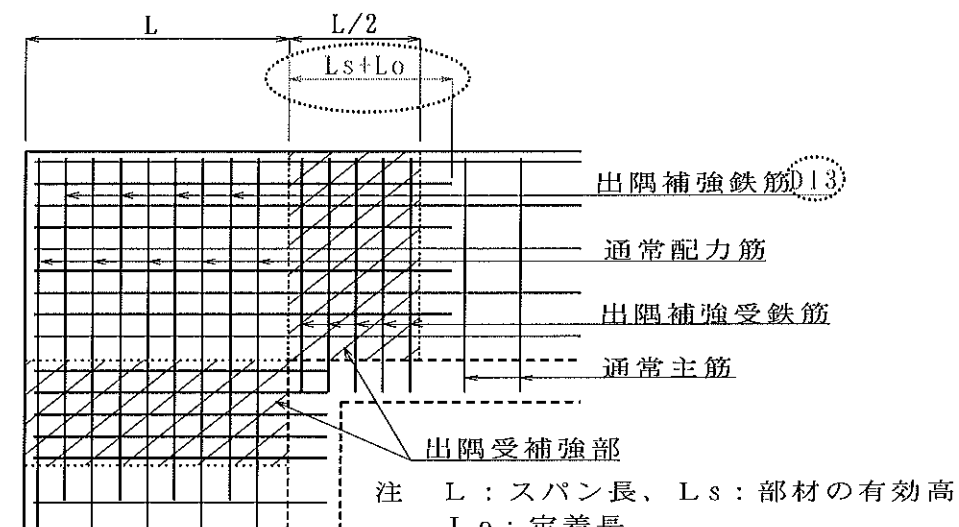
注 L: スパン長、Ls: 部材の有効高
Lo: 定着長

図8-3 出隅部の補強

8. 床版の配筋要領

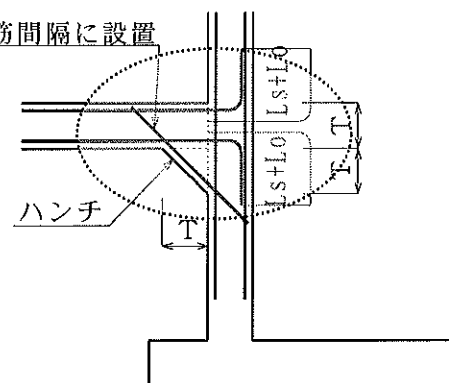
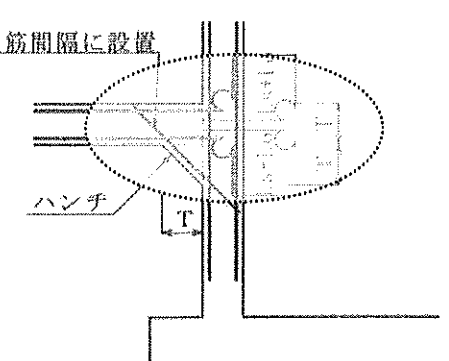
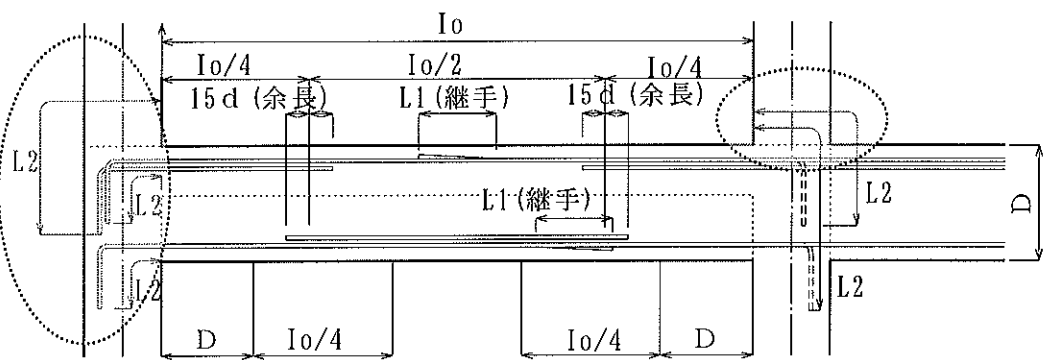
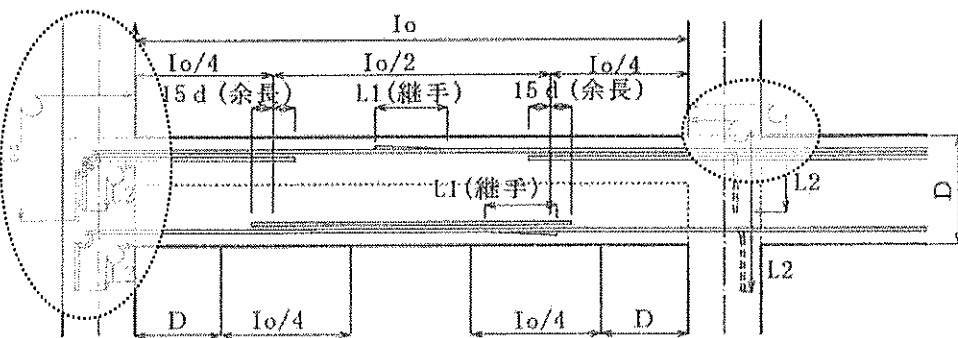
4) 出隅部の補強

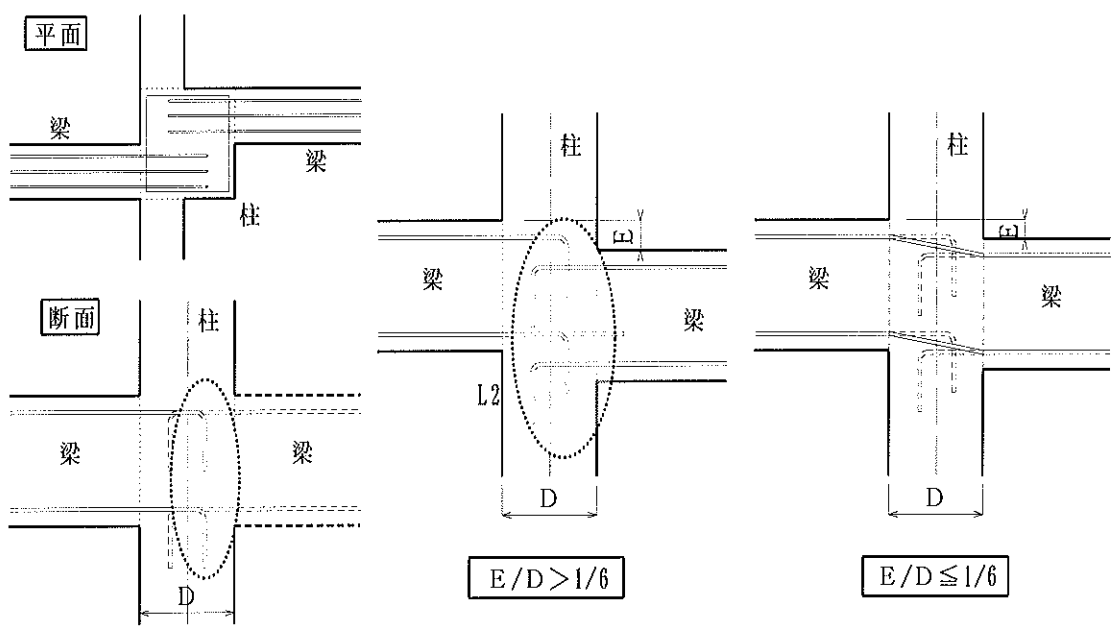
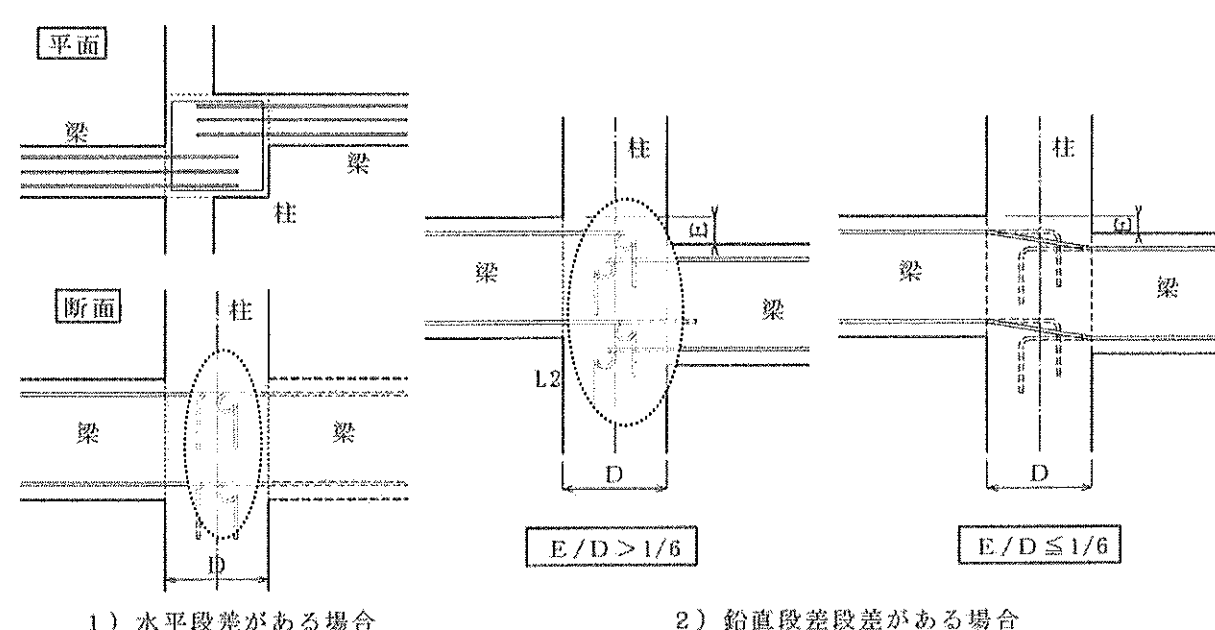
出隅部の補強は、出隅補強鉄筋と出隅補強受鉄筋とにより行う。標準的な出隅補強方法は図8-3に示す。

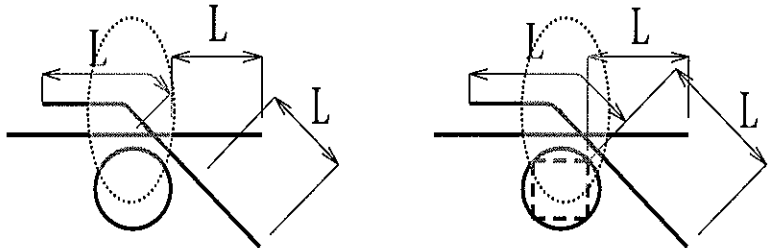
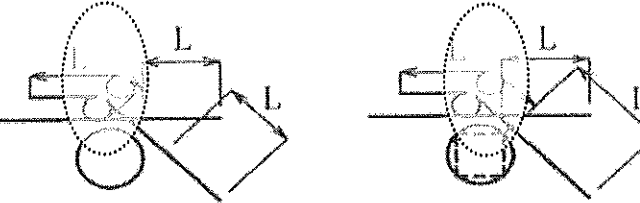


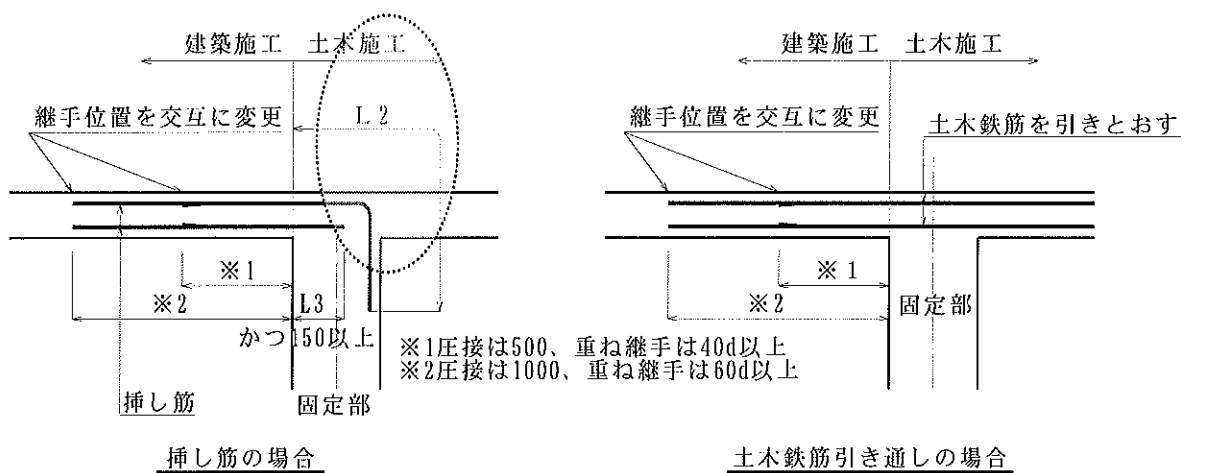
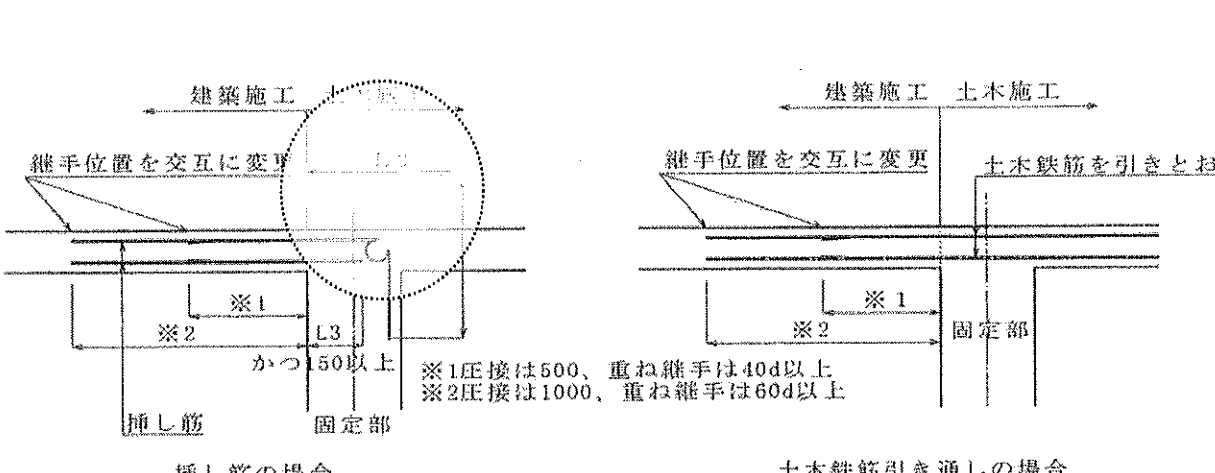
注 L: スパン長、Ls: 部材の有効高
Lo: 定着長

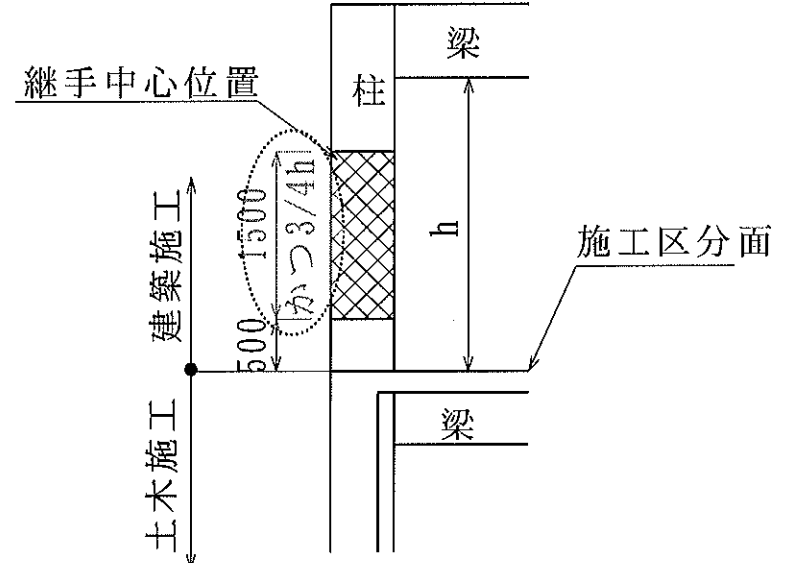
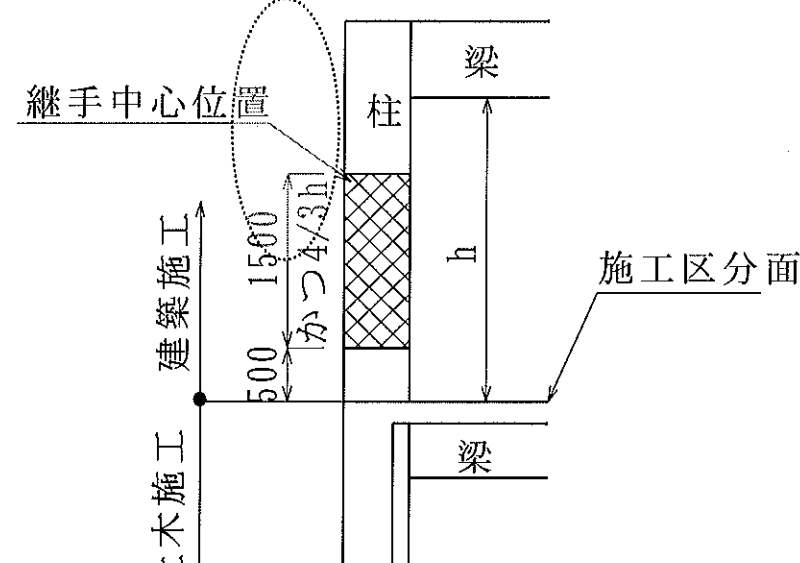
図8-3 出隅部の補強

ページ	正	誤
29	<p>2) 段差のある底版の配筋 (1) 段差が大きい場合 上段の底版と壁との結合部が構造上の弱点になるため、補強のためにハンチを設ける。この場合、上段の底版の基礎は埋戻し土となるため、十分に締め固めておかなければならない。</p> <p>D13を主筋間隔に設置</p>  <p>注1 図中のLsは部材の有効高、Loは定着長を示す。</p> <p>図 9-2 底版相互の段差が大きい場合</p>	<p>2) 段差のある底版の配筋 (1) 段差が大きい場合 上段の底版と壁との結合部が構造上の弱点になるため、補強のためにハンチを設ける。この場合、上段の底版の基礎は埋戻し土となるため、十分に締め固めておかなければならない。</p> <p>D13を主筋間隔に設置</p>  <p>注1 図中のLsは部材の有効高、Loは定着長を示す。</p> <p>図 9-2 底版相互の段差が大きい場合</p>
31	<p>(3) 梁主筋の標準的な継手位置及び定着方法は図 10-2 とする。</p>  <p>注1. ——— 印は、継手及び余長位置を示す。 2. 破線は、柱、壁内定着の場合を示す。 3. dは鉄筋呼称を示す。</p> <p>図 10-2 建築構造物としての梁主筋の定着位置</p>	<p>(3) 梁主筋の標準的な継手位置及び定着方法は図 10-2 とする。</p>  <p>注1. ——— 印は、継手及び余長位置を示す。 2. 破線は、柱、壁内定着の場合を示す。 3. dは鉄筋呼称を示す。</p> <p>図 10-2 建築構造物としての梁主筋の定着位置</p>

ページ	正	誤												
32	<p>3) 段差がある場合の配筋要領</p> <p>段差が水平方向にある場合は、柱及び壁内で定着してもよい。段差が鉛直方向にある場合で、$E/D \leq 1/6$ の場合は梁主筋を引き通すか、柱及び壁内で定着してもよい。$E/D > 1/6$ の場合は、柱及び壁内で定着してもよいが、やむをえない場合は梁内で定着してもよい。</p>  <p>1) 水平段差がある場合</p> <p>2) 鉛直段差がある場合</p> <p>注 定着長は土木、建築構造物ともそれぞれの基準を採用する。</p> <p>図 10-4 段差がある場合の配筋要領</p>	<p>3) 段差がある場合の配筋要領</p> <p>段差が水平方向にある場合は、柱及び壁内で定着してもよい。段差が鉛直方向にある場合で、$E/D \leq 1/6$ の場合は梁主筋を引き通すか、柱及び壁内で定着してもよい。$E/D > 1/6$ の場合は、柱及び壁内で定着してもよいが、やむをえない場合は梁内で定着してもよい。</p>  <p>1) 水平段差がある場合</p> <p>2) 鉛直段差がある場合</p> <p>注 定着長は土木、建築構造物ともそれぞれの基準を採用する。</p> <p>図 10-4 段差がある場合の配筋要領</p>												
33	<p>5) 梁貫通孔の補強</p> <p>梁を貫通する孔の径及び孔の中心位置は図 10-5 とする。孔が円形でないときはこれの外接円とする。</p> <table border="0" data-bbox="415 1533 831 1680"> <tr> <td>$500 \leq D < 700$</td> <td>$d \geq 175$</td> </tr> <tr> <td>$700 \leq D < 900$</td> <td>$d \geq 200$</td> </tr> <tr> <td>$900 \leq D$</td> <td>$d \geq 250$</td> </tr> </table>	$500 \leq D < 700$	$d \geq 175$	$700 \leq D < 900$	$d \geq 200$	$900 \leq D$	$d \geq 250$	<p>5) 梁貫通孔の補強</p> <p>梁を貫通する孔の径及び孔の中心位置は図 10-5 とする。孔が円形でないときはこれの外接円とする。</p> <table border="0" data-bbox="1662 1533 2077 1680"> <tr> <td>$500 \leq D < 700$</td> <td>$d \geq 175$</td> </tr> <tr> <td>$700 \leq D < 900$</td> <td>$d \geq 200$</td> </tr> <tr> <td>$900 \leq D$</td> <td>$d \geq 175$</td> </tr> </table>	$500 \leq D < 700$	$d \geq 175$	$700 \leq D < 900$	$d \geq 200$	$900 \leq D$	$d \geq 175$
$500 \leq D < 700$	$d \geq 175$													
$700 \leq D < 900$	$d \geq 200$													
$900 \leq D$	$d \geq 250$													
$500 \leq D < 700$	$d \geq 175$													
$700 \leq D < 900$	$d \geq 200$													
$900 \leq D$	$d \geq 175$													

ページ	正	誤
33	<p>5) 梁貫通孔の補強</p>  <p>注) L : 定着長</p> <p>図 10-6 補強鉄筋の定着長</p>	<p>5) 梁貫通孔の補強</p>  <p>注) L : 定着長</p> <p>図 10-6 補強鉄筋の定着長</p>
41	<p>3)</p> <p>せん断補強筋として施工する場合は、鉄筋径、間隔は構造計算で算出するが、最小間隔は鉄筋によりせん断力による斜めひび割れの発生防止を図るため、<u>部材厚の 1/2 以下</u>の間隔で配置しなければならない。</p>	<p>3)</p> <p>せん断補強筋として施工する場合は、鉄筋径、間隔は構造計算で算出するが、最小間隔は鉄筋によりせん断力による斜めひび割れの発生防止を図るため、<u>部材厚の 1/2 以下</u>の間隔で配置しなければならない。</p>
47	<p>14. 土木部分と建築部分の取り合い</p> <p>2) 柱鉄筋の取り合い</p> <p>C1、C-2 は継手中心位置が施工区分面上 500mm 以上 1500mm 以内、かつ階高さの <u>3/4 以下</u>の範囲で継手を設けることができる長さとする。</p>	<p>14. 土木部分と建築部分の取り合い</p> <p>2) 柱鉄筋の取り合い</p> <p>C1、C-2 は継手中心位置が施工区分面上 500mm 以上 1500mm 以内、かつ階高さの <u>4/3 以下</u>の範囲で継手を設けることができる長さとする。</p>

ページ	正	誤
48	<p>3) 床版鉄筋の取り合い 建築部分の床版との取り合いは、隣り合う土木部分の固定部に、挿し筋をするか、土木部分の床版鉄筋を固定部を引き通し、建築部分に継ぎ手に必要な寸法をだしておく。(図 14-5)</p>  <p style="text-align: center;">図 14-5 床版主筋の取り合い</p>	<p>3) 床版鉄筋の取り合い 建築部分の床版との取り合いは、隣り合う土木部分の固定部に、挿し筋をするか、土木部分の床版鉄筋を固定部を引き通し、建築部分に継ぎ手に必要な寸法をだしておく。(図 14-5)</p>  <p style="text-align: center;">図 14-5 床版主筋の取り合い</p>

ページ	正	誤
50	<p>14. 土木部分と建築部分の取り合い</p> <p>2) 柱鉄筋の取り合い</p> <p>柱鉄筋の重ね継手の中心及びガス圧接位置は、建築工事共通仕様書によると、施工区分面上端から 500mm以上、1500mm以下、かつ、階高きの <u>3/4 以下</u> しなければならない。</p>  <p>図 14-8 柱の継手位置</p>	<p>14. 土木部分と建築部分の取り合い</p> <p>2) 柱鉄筋の取り合い</p> <p>柱鉄筋の重ね継手の中心及びガス圧接位置は、建築工事共通仕様書によると、施工区分面上端から 500mm以上、1500mm以下、かつ、階高きの <u>4/3 以下</u> しなければならない。</p>  <p>図 14-8 柱の継手位置</p>